新体操 魂

第１号

カウントダウン！
福井インターハイ特集号

井原高校 × 臼井優華
連覇の可能性は？

☆ロンドン五輪 開幕直前企画☆
新体操競技の見どころ
（山本里佳／日高舞）

ロングインタビュー
中田吉光（青森大学新体操前監督）

PHOTO　by 小林隆子　　2012/7/18 発行

＜撮影：小林隆子＞

快進撃の井原高校、その強さの原点に迫る！

2011年インターハイ制覇、そこから2012年選抜、同年全日本ユースと快進撃を続ける岡山県井原高校。実績もさることながら、圧倒的な完成度、精度の高い体操、見るものすべてを惹きこむ構成は見るものを魅了してやまない。その強さと魅力の原点を探った。

＜取材・文・写真／横田泉＞

六月三十日、岡山県井原高校体育館。インターハイ連覇がかかる井原高校が、今年勝負する演技の練習を始めた。部分練習を開始して数秒で、感情よりも先に肌が感じ取った。「これは凄い作品だ」と。

選手が定位置についただけでピンと空気が張る。そこから序盤のわずかな動き出しの中で、空気は何通りにも変化する。気迫をみなぎらせ、鋭さをもち、意表をつく――。さまざまな形で胸に迫り、心を動かした。大げさではなく、息が止まった。それは体が、呼吸している場合ではないと判断したからだ。本能が、息を殺して、もてる全ての神経を駆使して、演技を注視すべきだと感じたからだ。無論、言葉など発する余地もなかった。

練習を見ながら、長田京大（きょうた）監督が「どうですか？」とたずねてきた。賛辞の言葉を尽くして感想を述べたが、おそらくそのどれもが十分ではなかったはずだ。ただ、

「何度でも見たいと思った」と伝えると、「それは良い言葉ですねぇ」と笑った。その笑顔の裏に、どれだけの時間と労力が費やされてきたのだろうか。

時間と労力、ということに関して言えば、このチームに勝るものを私は知らない。平日は学校が終わって、十六時半からだいたい二十二時～二十三時まで。演技の構成づくりの時期には、平日にもかかわらず日をまたぐことも少なくない。休日も朝九時から夕方まで、八～九時間程度は練習する。

井原の凄さは、これだけの長時間の練習でありながら、集中力がほとんど衰えないという点である。これはその場の雰囲気というだけでなく、あることからも証明されている。このチームはケガ人が極端に少ないのだ。新体操ではケガなどで主力メンバーを欠く、といったアクシデントはつきものだ。しかし、井原では少なくともそういったシーンを見た記憶はほとんどないし、長田監督にたずねても「うーん、もう数年はそういうことはないですね」という。これは紛れもなく、井原の特徴のひとつだ。

ケガ人が少ないというのは良いことだが、一方で、それは別の側面も持っている。それはつまり、控えの選手の出番がなくなるということだ。控えの選手がいつもメンバーのケガを考えているというわけではないが、少なくともレギュラーに入ることを念頭に練習している。少なくともチャンスがあることを示されなければ、普通控えのモチベーションは下がる。

強い選手を育てることと、強い控え選手を育てることは同義ではない。後者のほうが、はるかに難しい。控えの選手はどうしても高い意識を保ち続けることが難しい。

だが、井原の控えの選手たちに関してそういったことはない。ジュニア時代から見ているから、控えという立場をある程度理解しているということもあるだろう。しかし少なくとも丸一年、控えとして集中力を保ったまま、長時間の練習を続けることができるというのは、特殊だ。

集中力ということに関して、興味深いエピソードがある。優勝を果たした昨年のインターハイの団体演技。その演技の最中のことを、選手たちは一様に「あっという間に終わっ

た」と話す。井原は昨年の団体メンバーから一人しか抜けていないから、今年のレギュラーは五人が昨年の優勝メンバーだ。そのひとりで今年の主将・房野純（ぼうの　あつし）は「去年も今年も、演技はあっという間に終わりました」と話す。

三年の久津間理仁（たかひと）も「演技が始まるともう、気づいたら終わってるって感じでした」と言い、二年の西江琢臣（たくみ）も「試合は一瞬で終わりました」と振り返る。

どれも、演技中の集中力の高さを象徴するかのような言葉だ。

長時間の練習でありながら、極端にケガ人が少ないこと。控えの選手のモチベーションが下がらないこと。演技中に、皆が一様に高い集中力を発揮すること。実はこれらの秘訣はすべて、ひとつのことに起因する。おそらくそれは、「演技構成」だ。

井原の演技構成は例年、全日本選手権の終わった十二月頃から約半年間に渡って考え込まれる。それは時に三秒間の動きに一週間を費やすほど、綿密で繊細な作業だ。演技の中核になるのは、やはり長田監督の考えだ。以前から、「納得のいく構成を考えられなくなったときが、身を引くときだと思っている」という旨のことを話していた。それほど、構成作りに懸ける思いは強い。

数年前、長田監督の演技構成づくりに影響を与えた出来事があった。二〇〇九年、井原高校は人数不足で団体を組むことができなかった。この年、監督は何年かぶりに団体を離れたところから見ることができた。そして改めて、演技の客観的にみることができたという。言葉にするとなんてことのないことだが、これは監督業をやっていると実はとても難しい。当事者でないと物事の本当がわからないのと同じように、客観性というのも、本当に客観的な立場にたってみないとわからない。そして団体の監督を続けている限り、普通は離れることなどできない。

離れて団体をみて、奇しくも長田監督は改めて演技と観客の反応とを冷静に見ることができた。他校の演技構成、審判のジャッジ、

観客の反応、そして自身の感覚。そういったものを演技と照らし合わせることで、人の心を動かす演技の要素を考えることができたという。

だから、現在の井原の構成は客観的な視点を徹底して重んじている。見ていて会場が沸くかどうかというのが、監督の中でひとつの基準になっている。そしてそのポイントやタイミングも細かく計算しているという。

そして昨年のインターハイ。会場となった青い森アリーナの観客たちが沸いた瞬間は、どれも長田監督が想定していたポイントと完璧に一致していた。

井原の構成作りでは、選手たちの考えも取り入れられる。先に述べた客観的視点という意味と、純粋にアイディアを求めるためだ。選手たちは自分たちで動き考え、監督に提案する。しかしそこはそれ、求められるのは長田監督を納得させるものだから、提案が通ることはごく稀だ。選手が考え、提案し、却下され、また考える。これを繰り返してようやくいくつかの案が採用されるわけなのだが、選手が提案する動きというのは少なくとも「自分たちができる技」であり、時としてそれは「自分にしかできない技」であったりもする。また監督も、個々の選手の能力加味し、それぞれが最大限に生きる構成を考える。結果、試行錯誤して完成するのは「この六人でしかできない」演技だ。これはある意味、とてつもなく攻撃的な演技だ。

というのは男子新体操の団体演技では、演技する六人のポジションの中にひとつは「替えがきく」場所をつくっておくことが多いか

らだ。控えの選手でも入りやすいポジションを、ひとつつくっておく。それは、「いざケガ人が出た時のため」だったり、控えとレギュラーを競わせることで「選手と演技の質を向上させるため」だったりと、意図はさまざまだが、どちらにせよリスクヘッジとして有効だ。だが井原の演技には、これがない。どのポジションも替えがきかないのだ。

このことについて選手たちにたずねた。

房野は「(演技に対する)やりがいは大きいです。絶対にケガができないなと思います」と話す。彼は昨年の演技でフロア前面に立って徒手動作を行うことが多かった。それは、彼が井原の中でも抜きん出た徒手能力と表現力を持っていたからだ。中央に彼を据えるだけで、演技は格段に訴求力を増す。彼の持ち味を生かした配置だ。

『責任感が強くなります。『自分しかできない』と思うので。一人でも欠けたら演技できないので、絶対抜けられない」と語る原田幹啓は、昨年の演技では一番初めに観客を沸かせた、組技の要だ。腕を軸に体を鉄棒のように回転させるこの技は、彼の肩の柔軟性がないとできない。

「この演技は、このメンバーでないとできない。他が真似しようとしても絶対にできないです」というのは西江。彼は昨年、演技の冒頭とラストで組の頂上を務めた。背中を反り、頭の後ろで足をつかむこの体勢で周囲を圧倒する。いわずもがな、柔軟性の高い彼がいなければ成立しえない。

誰一人、欠けてはならない。だから彼らは演技への強い自負と責任感、練習への緊張感をもつ。演技に対し、並々ならぬ思い入れも抱く。

昨年は個人のみで、今年団体入りを果たした佐能諒一はこう話す。

「ジャパンで井原の練習を見た他の大学生が『すごい、すごい』と言っているのを聞いていたので、その団体に入れるのはうれしいです」

レギュラーであるのに、どこか憧れを抱いているかのように、そう言うのだ。

久津間は「演技はすごくキツイけど、後輩に自分のポジションは絶対にあげたくないです」と、演技のやりがいをかみしめるように話した。

久津間が話すように、井原の演技は相当に「キツイ」。見ているだけでも組み技は多く、どのポジションにも負担がかかる。長時間の練習で鍛えられているはずの選手たちが、わずか三分の演技の中で、やっている途中で足があがらなくなることがあると言う。演技中、倒立で足をつることさえあるという。

それでも、そうまでしても、選手たちが努力を続けるのは、誰よりも自分がこの演技をしたいと思っているからだ。この演技を最高の形で披露できるのは自分たち以外にいないことを、知っているからだ。

長時間の練習でもケガ人ひとり出さないこと。控えのモチベーションが下がらないこと。演技中に全員が高い集中力を維持していること。これは全て、このあまりにもキツくて、あまりに魅力的な演技構成に起因している。

自分にしかできない演技だから、選手は何としてもケガをするわけにはいかない。控え選手は、レギュラーさえも憧れるこの演技に入れるなら、一年くらいの努力は妥当だと考えるはずだ。演技中に高い集中力を発揮するのは、それだけ夢中になれるほど、この演技が魅力的だからだ。

今年のインターハイでも、井原は約半年間もかけて練り上げた演技で勝負をかける。徹底的に客観性を意識し、鍛え上げられた選手たちの能力を最大限に生かしたこの演技で、審判を、観客を、他校の選手さえも魅了することだろう。

だが井原の演技にもっとも魅了されているのは恐らく、それを演じている選手たちに他ならない。だから彼らは、強い。

2012インターハイを占う②

井原高校を猛追するライバル校の現在

取材・文／椎名桂子＆横田泉　写真／小林隆子

力強さを増したタンブリング＆異色の世界観

青森山田高校（青森県）

今年の作品は、津軽三味線を使い青森色が濃かった昨年とはまたがらりと違う異色作だ。３位に終わった高校選抜大会後には、「タンブリング力の差」を認める言葉を口にしていた荒川監督は、今シーズンはその差を埋めるべく、体幹トレーニングの強化、スプリングマットを使える環境整備を行ってきた。その結果、７月の取材時の青森山田のタンブリングはスピード、高さとも増していた。課題は、作品の独特な世界観を描き切るだけの表現力を見せられるかどうかと言えるだろう。美しい動き、表現力に関しては高い評価のある青森山田をもってしても、相当な鍛錬が必要なほど、今年の作品は手強い。それだけに、やり切れたときには観衆を魅了する可能性は十分にある。

井原独走阻止に執念を燃やす九州の雄

神埼清明高校（佐賀県）

３月の選抜では２位、６月の九州大会では優勝と、「打倒井原」を虎視眈々と狙っている感のある神埼清明の今年の作品のウリは、「徒手」だと中山監督は言う。「今年のうちは、深い体操が見せられる。脚のもっていき方ひとつも今までの神埼とは違う。」王者・井原に対抗できる自分達の強みは何かを考え抜き、トレードマークであった組みではなく、「ガツッと、どしっとした徒手、そして大きさ、強いタンブリング」で勝負しようと考えたのだと言う。神埼清明は今年も強い。しかも、今までのイメージを覆す演技を見せる！ジュニア時代から負け続けている井原に「一度は勝ちたい！」彼らのその思いは間違いなく本気だ。

年々洗練されてきた独特の構成で勝負！

埼玉栄高校（埼玉県）

３月の選抜で５位となっていた埼玉栄高校は、この結果を厳粛に受け止めていた。３年で主将の石川航大（ｺｳﾀﾞｲ）は、「（選抜の）上の４チームは19点台が出せるチーム。それを出さないと、そこに食い込むことはできないと思った」と振り返り、同じく３年の永久耕夢（ｺｳﾑ）も「上位４校からは自分たちに足りない、意識の高さを感じた」と話す。しかしながら５月に行われた全日本ユースでは、持ち前のアクロバティックな構成を、実に高い完成度でみせつけた。実はこのとき、チームは主力である鶴田優光（ﾕｳｷ）を直前に欠いており、かなり急ごしらえの状態だった。そこでみせた高い実施力は価値がある。さらに、選手たちは自分たちの全国の位置や課題を冷静に見つめる力がある。主力が揃えば、インハイでも高いパフォーマンスが期待できるだろう。

＜取材・文／横田泉＞

徒手と表現力で魅せる作品でメダル奪還を目指す！

小林秀峰高校（宮崎県）

2010年沖縄インハイでの「人間ピラミッド」で観衆の度肝を抜く演技で３位になって以降、2011度はインハイ、選選抜とも４位で表彰台を逃している小林秀峰高校。再び頂点を目指す小林が力を注いできたのは、振りの大きさ、スピードのある徒手と、音楽と動きを一致して見せる表現力の強化だ。トレードマークの組み技も健在だが、それも演技の流れを止めないように工夫し、改良を重ねてきた。永野監督は「少しおとなしめの演技と思われるかもしれないが、バランスの良さや、後半は曲を聴かせられるように考えた作品」と語る。今年の小林秀峰は「魅せる演技」で表彰台を目指す。

直線的な動きを効果的に使った新感覚の作品

盛岡市立高校（岩手県）

昨年の作品冒頭の一連の動きには、１度見ただけで忘れられないほどのインパクトがあった。2010年の「戦メリ」は言うまでもなく、盛岡市立は、毎年順位以上に記憶に残る名作を生み出していると言えよう。とくに音楽と動きの一致が秀逸な盛岡市立の今年の作品は、また面白い仕上がりになっている。「今のメンバーは決して能力が高いわけではないので、目新しいもので勝負するしかない。」と野呂監督は控えめに語るが、その工夫の結果、３分間の中で、天から光の降り注ぐ瞬間をも感じさせる名作が、今年もまた生まれようとしている。

2012 インターハイを占う③

高校３冠達成の絶対王者

臼井優華（済美高校）

インターハイ連覇に死角はあるか？

取材・文／椎名桂子　写真／小林隆子

六月八～九日の二日間、東海大会を目前に控えたＮＰＯぎふ新体操クラブの練習場を私は訪ねた。済美高校の選手達は、学校の授業が終わると、監督やコーチの運転する車で移動してきて、ここで練習をしている。

もちろん、臼井優華もその中にいる。

この時期は、練習時間の多くを済美高校初の団体に割いていた。やっと出場資格ギリギリの四人が揃い、なんとか東海大会で二位に入り、四人団体でインターハイに行きたい！というのがチームと臼井の悲願だった。

正直に言うなら、そうやって団体の練習に時間と体力がとられることは、臼井のインターハイ個人連覇の妨げにならないのだろうかと、私は少しばかり心配していた。が、臼井はこのとき、本気で「四人でインターハイ！」を目指していた。

「井原高校の団体とか見ていて、いいな～と思っていました。今年は自分にとって最後のインターハイだから、できればみんなと一緒に団体も出たいです。」

そう言う彼に、私は、「個人の練習時間が減る不安はないの？」と意地悪く聞いてみた。

すると彼は、こともなげにこう答えた。

「昔は、どっちかと言うと個人のほうが好きでした。手具のない団体で、自分の徒手の弱さを見せたくないという気持ちが強かったんです。でも、今は、団体ならではの動きが合ったときの楽しさや気持ちよさもわかってきたし、団体をやることで個人の徒手もよくなると思えるようになりました。だから、団体をやることのマイナスはないです。かえって個人もうまくなれる気がします。」

結果、残念ながら団体でのインターハイ出場の夢はかなわなかったが、臼井にはまだ「個人でのインターハイ連覇！」という命題が残っている。記録を遡ってみると、最後にインターハイを連覇したのは内海祐吾（当時前橋工業）で、昭和六十～六十一年のことだ

った。じつに二十五年間、インターハイを連覇した選手は出ていないのだ。

臼井はすでに、昨年度、ユースチャンピオンシップ、インターハイ、高校選抜のすべてに優勝し「高校三冠」を達成している。今年度に入ってからもユースで優勝し、「ユース三連覇」も成し遂げた。三連覇のかかったユースでは、かなりプレッシャーもあったのではないかと思うが、それも臼井は、

「プレッシャーというより、最後のユースと思うとけっこう清々しい気持ちでやれました。あまり最後と意識しないようにしたら、試合を楽しむことができました。」と言う。

となれば、最後のインターハイも楽しむことができそう、だろうか。

「勝つことは好きだし、負けるのは嫌いだから、負けたくない気持ちはあります。だけど、今年のインターハイは勝敗よりも自分の全力が出せるかどうかだな、と思っています。」

そう言う臼井には、インターハイで挑戦したいと思っていることがある。

「選抜大会の前に練習していて怪我してしまった技なんですが、ロープの演技に新しいタンブリングのシリーズを入れようと思っているんです。ただ、まだ成功確率が高くないんですが、インターハイに間に合えばやりたいなと思っています。」

今までの演技のままでも十分戦えるし、勝つこともできるだろうに、さらに上を目指して挑戦する。この向上心が臼井優華が絶対王者たるゆえんだ。

今の臼井なら四種目やれば、一つくらいミスが出てもほかの三種目で十分カバーする点数を稼げるので、まず負けることはない。

しかし、インターハイは二種目しかない。万が一、ミスが出てしまうと、ライバルが二種目ノーミスだった場合は、臼井と言えどひっくり返すのが難しくなってしまう。私は、それを指摘して、「二種目だと嫌だとは思わない？」と聞いてみたが、

「いや、二種目ですめば、やはり楽です。一種目ずつに集中できるので。」この質問もまたさらりといなされてしまった。

「演技する前に確認しなければいけないことが、どの種目でもたくさんあります。種目が少なければその分、確認することも少ないので、ちゃんとやれると思います。四種目あると、どうしても後でやる種目のことがふと気になってしまって、目の前の種目に集中できないこともあるので、二種目だけに集中で

きるのは、自分にとってはいいです。」

どうにも死角は見つけられない。それほどに今の臼井優華は充実している。卓越した技術をもっていることももちろんだが、精神的な安定感が高校生離れしているのだ。

スピード感にあふれ、手具操作もこれでもかと盛り込まれた臼井の演技は、一瞬たりとも気が抜けないと同時に、余計なことは一切考える余地がない演技だと思う。ていねいにやることは必須ではあるが、「ここは慎重にやろう」なんていう意識が入り込めば、そこに綻びができてしまうような、そんな演技なのだ。だから臼井は、本番の一本のときは、

おそらく「何も考えていない」。何も考えず、ただ練習でいつもやっている通りに、体が覚えている通りにやるだけ、なのだろう。そうでなければあれだけの演技を、これほど高い確率でミスなくやり通すことはできない。

父であり、NPOぎふ新体操クラブ総監督の臼井俊範氏に話を聞くと、「一年生のときのインターハイで勝てなかったことで、試合に向けての精神統一の仕方が変わったな、と思います。今にして思えば、あの試合で負けたのが良かったような気がします。」と言う。

試合でノーミスの演技をするためには、ほんのわずかでも意識の空白を作らないこと。思い通りのところに手具が落ちてきても、取る前に安心しないこと。一年生のインターハイでの敗戦で、臼井はそれを思い知ったのだろう。

そして、四種目ある試合で、三種目目まで勝っているからと安心しない、気を抜かない。そんな厳しさもすっかり彼は身につけた。

「高校選抜のときは、一番心配だったロープが三種目目でうまくいったので、ちょっとほっとして私は思わず握手しようとしたんですが、優華のほうが『まだ』と言って、握り返してくれませんでした。」と苦笑いしながら話す臼井氏。勝負に懸ける厳しさは、すでに父をも凌ぐ臼井優華のインターハイ連覇は、きわめて高い可能性で実現しそうだ。

臼井優華だけじゃない！
個人注目選手①

永井直也（青森山田高校２年）

ユースチャンピオンシップでは、２年連続準優勝。臼井優華の背後に常にぴったりとついている「美しき刺客」と言ってよいだろう。高校生になって１年目の昨年は、どこかのりきれてないような演技を見せることもあったが、今年のユースでは、「永井直也の真骨頂」とも思える素晴らしいパフォーマンスで観客を魅了。テクニックでは他を圧倒する臼井に対抗できる選手がいるとしたら、臼井とはまったく別の個性で輝きを放つ永井がやはり最有力かもしれないと思わせるユースでの演技だった。

動きの柔らかさや表現力はもとより、高校生になってからタンブリングの安定感や高さも増してきたうえ、ユースでは手具操作の巧さもしっかりと見える実施ができていた永井のポテンシャルの高さは侮れない。力強く迫力のある演技を見せる「剛」の臼井に対して、息を飲むほどの美しさが見る者の胸に迫る「柔」の永井。柔よく剛を制す、となるか？　福井インターハイの大きな見どころだ。

＜写真提供／清水綾子＞

臼井優華だけじゃない！
個人注目選手②

小川晃平（井原高校２年）

選抜準優勝の佐能諒一をおさえてインハイへの切符を掴んだのは、井原高校２年の小川晃平だった。インハイ予選は佐能のミスが大きく影響したが、実は彼自身も「オールマイティ」と評される選手だ。動きのスピード、タンブリングの高さなど、基本的なポテンシャルが高い。さらに、努力ではなかなか身につけることのできない「雰囲気」を持った稀有な選手だ。しかし彼の大きな魅力は、演技に対する客観的な視点をもっていること。小川は練習前に他の選手のビデオを見て研究してから練習に入るという。そして「自己満足じゃなく、まわりから見てどうか」を考えるようにしている。客観性を意識した演技を、高い身体能力と雰囲気で体現することができるのだ。インハイはもちろん、今後も注目に値する選手だ。　＜取材・文・写真／横田泉＞

山本里佳 Rika Yamamoto

国士舘大学新体操部女子監督。現役時代は東京女子体育大学の団体メンバーとして世界選手権にも出場。指導者としてブルガリアで学んだ経験もあり、指導中によく「もっとエモーショナルに！」と叫び、演技者の思いの見える新体操を目指している。

☆個人総合

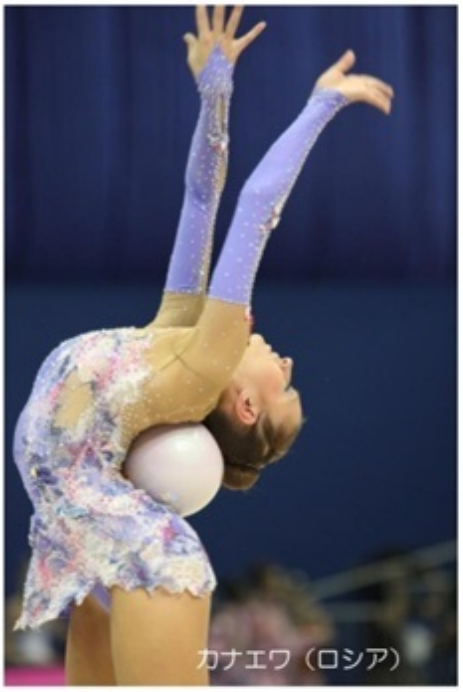
ロシアの二番手は誰がきても銀メダル以上の可能性あり！

カナエワ（ロシア）の優勝は堅いでしょう。彼女にもピボットの重心が外に逃げやすいという理由により、回転数があまり出ないなどいくつかの欠点はありますが、それを柔軟性で補っているので、柔軟やジャンプなど高い難度を申告していても、ほとんどがカウントできます。

四種目とも違う趣きのある演技ですが、どれも女王の風格があり、彼女がフロアに出てきただけで観客も審判さえも喜びを感じる、そんな選手になったと思います。リボンは二〇一一年から同じ作品ですが、内容はより高めてきていて、他の人はやらないような操作も入っていて見逃せません。

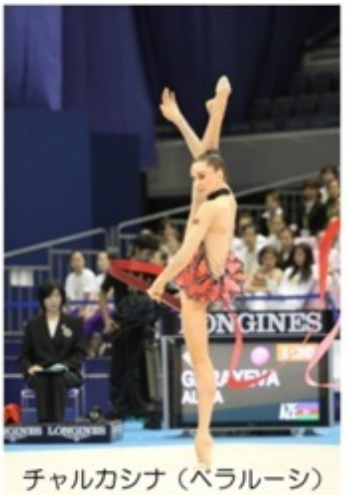
ロシアの二番手としてエントリーされそうなのは、メルクロワかディミトリエワ。メルクロワは、試合に出るたびにうまくなっている売り出し中の選手。前に出ていこうとするエネルギーが凄まじくて、アピール性が抜群。ただ、まだつなぎがたどたどしいところもあり、五輪に出ても銀メダルの可能性はあると思いますが、カナエワを食うことはないでしょう。

ディミトリエワは、揺るぎない天性の軸をもっていてピボットを回り始めたとたんに見る人を圧倒する力があります。ロシア的なエレガントな表現がとてもマッチする選手で、四種目それぞれに違う印象の曲表現もでき、カナエワに少しでもミスがあれば、凌ぐ

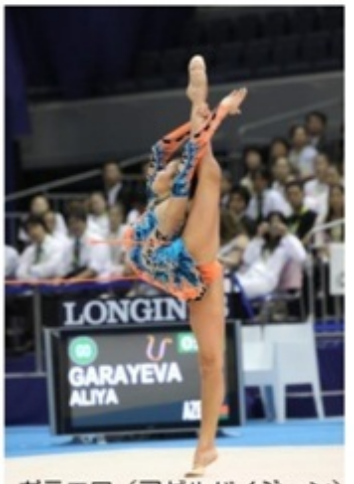

カナエワ（ロシア）

かもしれないという可能性を感じます。

ロシア勢に続きそうなのは、チャルカシナ（ベラルーシ）、ガラエワ（アゼルバイジャン）あたりでしょう。チャルカシナは、北京五輪にも出ていましたが、個人では予選十五位でした。このころの彼女は、手具があまり動かない演技をする無難な感じの選手でした。ルールが変わったため二〇〇九年はミスばかりしていたのですが、二〇一〇年になると高いリスクの演技をミスなく実施するようになり、表現のうまさも出てきて別人のように伸びました。ベラルーシにはこういう「はじめはぱっとしなかったけれど、だんだんよくなる」という選手が多く、ベラルーシの指導力を感じます。ただ、ロシア勢に比べると突出したものがないところが弱いかな、と思います。



チャルカシナ（ベラルーシ）



ガラエワ（アゼルバイジャン）

ガラエワは、身体能力の高さと明るさが魅力の選手。以前に比べてミスが減ったので、能力に見合った得点がやっと出せるようになってきました。ただ、残念ながら変わりばえがしないという印象は否めません。

ミテバ（ブルガリア）も玄人好みのするいい選手ですが、五輪の個人総合で勝てるようなダイナミズムのある選手ではないように思います。

他に注目したい選手としては、リサディノワ（ウクライナ）。この選手のピボットはすごく回転力があります。身体能力が高く、ちょっと異色な印象の選手ですが、手具操作などは他の選手に比べるとやや単調かもしれません。

リフキン（イスラエル）も身体能力が高く、引くところのない選手。また、トロフィモワ（ウズベキスタン）、アリヤビエワ（カザフスタン）なども、すごく上にはこないかもしれませんが、「自分らしさを出せる凄さ」が出てきた注目株の選手です。

台風の目になりそうなアジア勢

そして、台風の目になりそうなのがデン（中国）とヨンジェ（韓国）です。デンは、申告した難度はすべてカウントできますし、

デン（中国）

身体能力に余裕があり、ミスもしない。D1、D2、A、Eすべてがハイレベルで、もしかしたらカナエワよりも上なのでは？　と思わせるものをもっています。四種目それぞれ違う表現ができて、大きさも出せるので演技が魅力的。地元開催の有利があった北京五輪のときなら優勝だって狙えたのでは、と思う選手です。

ヨンジェは、デンほどD1の余裕はないですが、スター性と人気ではカナエワを凌ぐ選手です。ここ最近は身体能力と技術、表現のバランスが良く、入賞の可能性大です。このアジアの二人には期待したいです。

☆団体競技

ノーミスならイタリアにも優勝の目が出てくるか？

優勝はロシアだと思います。身体能力はもっとも高いチームですし、このところ、連係、リスク、個人技のリスクなどで加点要素をどんどん増やしているので、演技構成がイタリアよりもリスキーになってきています。それだけにリボン&フープなどはミスも出ていますが、この内容で演技が成功すれば、ロシアの優勝は絶対的なものになるでしょう。不安があるとすれば、試合前の減量。以前のロシアは過激な減量をしていたのですが、練習量とのバランスがとれていなければ危険です。今後の調整に無理がなければ問題ないと思います。

ロシア

イタリアも攻撃的なすばらしい演技をするチームですが、ここにきて怪我をかかえている選手がいるのが不安材料です。試合の前日までジャンプを抜いたりして、本番だけしかフルでの通しができないような様子も見られ、そのためかミスも出ています。以前は、二十本のノーミス通しなど追い込んだ練習をしていたのですが、今はそこまでやれないチーム状況のように思います。もちろん、ミスなくやればかなりロシアに迫れるチームであることは間違いありません。

安定感があるのはベラルーシ。イタリアはすこしD1が弱いので、その点はベラルーシのほうが評価されると思います。同調性にも優れていていいチームだと思います。ブルガリアまでが四強と言われていますが、今年の

イタリア

ベラルーシ

ブルガリアは去年よりも簡単な作品にしてまとめてきました。上のチームのミス待ちという作戦かもしれませんが、こういう演技だと芸術点はあまり出せないと思います。動きは美しいし、ミスもしないでしょうが、ブルガリアらしい作品かというとちょっと疑問が残ります。ブルガリアらしい芸術表現と手具操作の巧みさなしに芸術点が高く出ることは望めないのではないでしょうか。

日本は、その次に入る可能性もあると思います。海外の試合での日本への評価を見ていると、ロシアの作品力はやはりすばらしく、非常に巧みに構成されていて「難しくはないかもしれないがよく見える演技」なので、高い芸術点を稼げる可能性はあります。大きいミスがなければ入賞の可能性はかなり高いと思います。弱いのはD1ですが、そこを少しでも上げようと、「どの難度ならカウントしやすいか」をみんなで研究しているので、最後まで貪欲にやってほしいです。

入賞を争うライバル国の中で、ドイツはD1がカウントしやすい堅実なチームですが、作品は去年のほうがよかったのではないでしょうか。今年の仕上がりには少し勢いを欠きます。イスラエルも作品は去年のほうがよくて、最近になってどちらかの種目は去年の作品に戻しています。D1は日本よりも強いので侮れません。もっとも強力なライバルはスペインでしょうか。音楽と構成がとてもよく一致していて作品はすばらしいです。ただ、動きに粗いところがあるのと、ときどき大きなミスをするのがこのチームです。日本、イスラエル、スペイン、ドイツ。このあたりの国の順位は、ミスの有無で大きく変わってきそうです。

（取材・文／椎名桂子
写真／小林隆子）

日本

日高 舞 Mai Hidaka

2011 年の全日本選手権をもって現役を引退。現在は、安達新体操クラブや東京女子体育大学ユースジュニア新体操クラブでコーチを務めながら、各地の講習会の講師なども精力的に引き受け、忙しい日々を送っている。

☆個人総合

絶対的優勝候補はカナエワ！

個人は、やはりカナエワ（ロシア）が優勝の最有力候補だと思います。今年、三十点満点を出したフープは、カナエワらしい、軽すぎずよく似合う曲を使っているなと思います。

北京五輪でも優勝しているカナエワですが、今にして思えば、四年前は、五輪という舞台にすこしびくびくしているような感じもありました。予選ではロープをふっ飛ばしたりしています。五輪では何があるかわかりませんから、絶対に優勝！とは言い切れませんが、かなり高い確率でカナエワが優勝するんじゃないでしょうか。なにしろカナエワの演技には、ほとんど予備動作がなく、次に何をやるかまったくわからないんです。

無駄に手具を持ちかえたりもしないので、すべての動きがつながっていて、演技からストーリーが見えるんです。強いて言うならすこし派手さには欠ける気がしますが、それを補って余りある技術があり、揺るぎない優勝候補だと思います。

ディミトリエワ（ロシア）

対抗は、コンダコワ（ロシア）だと思っていましたが、残念ながら怪我が回復せず五輪には間に合わなかったようです。ミスなくやれれば、カナエワと互角にやれる力はある選手だったのでとても残念です。

そうなると、ロシアの二番手が誰になるのか、が問題ですが、今までの実績からいくとディミトリエワが有力でしょう。この選手はとにかくピボットが回るし、ぶれない。パンシェでも軽々4周は回るし、踊りもうまいです。ただ、コンダコワほどの派手さはない気がします。

もう一人、メルクロワもこのところぐんぐん上がってきているので、侮れません。この

選手は、ロシアを仕切っているビネルコーチの大のお気に入りらしいので、ロンドン五輪は案外、メルクロワが出ることになるかもしれませんね。彼女は、とても華のある選手ですし、どちらが出てきてもロシア勢のワンツーは揺るがないんじゃないでしょうか。

ミテバがメダルを獲ってくれたらすごくうれしいんですけど…。

三位争いとなると、ガラエワ（アゼルバイジャン）、チャルカシナ（ベラルーシ）、ミテバ（ブルガリア）のうちの誰かでしょうか。個人的にはミテバが三位に入ってくれると嬉しいですけど難しいかな。ミテバは、二〇〇八年までは目立たなかったのに、五輪後にルールが変更になってから急に上がってきた選手です。とにかく手具感覚がよくて投げもどんぴしゃなところに落ちてくるし、リスクもうまい。私は大好きな選手です。

ただ、有力なのはガラエワでしょうか。能力的には三人の中では一番高いと思います。今まではミスが多くて順位を上げきれませんでしたが、このところミスも減ったし、難度の精度も上がってきているので、表彰台にのるかもしれません。

ミテバ（ブルガリア）

チャルカシナは、好き嫌いの分かれる選手かな、と思うのですが、基本がしっかりしているので減点は少ないですし、独特な雰囲気があっていいですよね。難度やリスクなどにものすごいものがあるわけではないですが、味のある演技をする選手です。

五輪では予選十位までが決勝に残れるので、上位争い以上に決勝へのサバイバルレースが面白くなりそうです。

マキシメンコ（ウクライナ）も、去年あたりかなり良くなっていましたが、今年は本調子ではないようで、迫力に欠ける気がします。かえって二番手のリザディノワ（ウクライナ）のほうが、四種目がそれぞれ違って見え、体全体で音楽を感じて動ける魅力があり、いいかもしれません。ピボットもよく回るし、美しい、将来性のある選手です。

アジア勢には決勝進出を期待！

あとなんと言っても注目はアジア勢でしょう。ヨンジェ（韓国）は、ロシアを拠点に練習するようになってからとても点数が伸びましたが、決してロシアの政治力ではなく、彼女自身の努力と強い気持ちの賜物だと思わせる演技をします。日本人と差はない体型

ですが、向上心の強さを感じさせる演技や「見せ方」のうまさなど日本のジュニアにもお手本にしてほしい選手です。

デン（中国）は、去年のイオンカップにも出ていましたが、とにかくのびやかでフロアではとても大きく見えます。実際は身長が大きくないんですが、大きく見せるだけの跳躍力もあるし、フロア内の移動が大きいんです。そして曲がまったくＢＧＭにならず、音楽を表現するように動けるすばらしい選手です。この二人は決勝に残れるんじゃないかと期待しています。

個人的にはベテランながら頑張っているカンタルッピ（イタリア）もぜひ注目してほしい選手です。身長も低くて体型に恵まれた選手ではないですが、とにかくエネルギッシュな演技を見せてくれます。

カンタルッピ（イタリア）

☆団体競技

金メダルをあげたいのはイタリア！

優勝は、イタリアとロシアの争いでしょう。イタリアの演技は、「今から交換やりますよ」というような間がほとんどなく、切れ目なく交換が続くので、常に手具がいくつかは宙に浮いてるような感じの攻めの演技です。以前は「ロシアと比べると体の難度がとりにくい」と言われていましたが、最近はそれもかなりよくなっているように思います。個人的には、イタリアに金をとらせてあげたいです。

対するロシアは、二〇〇九年あたりからミスが多いんです。メンバーも毎年入れ替わっていて落ち着かない感じがあります。それでも高い難度がとれることではトップですから、手具でのミスが出なければ、優勝の可能性も高いと思います。今年のロシアは作品もすばらしくて、フープ＆リボンは「どうなってるの？」な大技の連続です。それでもヨーロッパ選手権では、ノーミスを出しているので、五輪でもノーミスで決めればイタリアを突き放すかもしれません。

この二強を追うのは、ベラルーシとブルガリア。そこまでの四強はよほどのことがないと変わらないのでは、と思います。

日本もその下にはなんとか食いついてもらいたいですが、強力なライバルになりそうなのが、イスラエルとスペイン。イスラエルは能力の高いチームなので、ミスがなければ日本と競ることになるし、スペインは作品がいいです。いかにもスペイン！なスパニッシュの曲を使っていますが、それがはまっていて、まったくＢＧＭじゃないんです。動きにもキレがあるし、おもしろい連携技なども入っていますから、決まれば高得点が期待できそうです。ただ、スペインは北京五輪でもフープ＆クラブでのミスで自滅した経験をもっています。本番強さが出てくれば日本にとっては手強い相手になりそうです。

（取材・文／椎名桂子
写真／小林隆子）

中田吉光ロングインタビュー

「次は日本の監督になります！」

～私が、青森大学監督をおりた理由～

二〇一二年五月、東日本インカレのプログラムを見て驚いた人は多かったのではないか。

インカレ十連覇中の青森大学の監督の名前が「中田吉光」ではなく、昨年まで青森大学のコーチを務めていた高岩薫だったからだ。

実際、東日本インカレの会場に中田は来てはいたが、ほとんど観客席から見守っている、という状態でその姿からは、「もう青大の監督は自分ではない」という決意めいたものが感じられた。

創部から十一年間、青森大学新体操部を率い、常勝軍団に育てあげた名将から若き指揮官への交代劇は、なんともあっけなかった。もっとも、野球やサッカーのようなメジャースポーツ以外では、日本一のチームの監督が代わったところで、記者会見もなければプレス発表もない。あっけないのも当然か、と思ったが、私にはなぜ今、このタイミングで、中田が監督を退いたのかがわからなかった。

なぜなら、ちょうど一年前、取材で青森を訪れたときに聞いた中田の言葉が記憶に残っていたからだ。夜明け近くまでお酒を飲んで、かなり酔いのまわった状態で中田吉光は、こう言った。

「おれには、勝ち続けなきゃならない理由がある。」

そして、彼は一つの金メダルを見せてくれた。何かの大会のメダルかと思ったが、そうではなかった。中田が大学を卒業して最初に赴任した大阪の生野工業高校の生徒が中田に贈った金メダルだったのだ。

国士舘大学で、男子新体操選手と

して活躍してきた中田が、教師として初めて赴任したこの高校は、もちろん男子新体操の名門でもなんでもない。しかも当時の工業高校は、いわゆるテレビドラマで描かれる「工業高校」のイメージそのままの荒んだ雰囲気だったという。

しかし、若くて熱血だった中田は、その学校で生徒達に新体操を教え始めた。もちろん、みんなど素人だが努力した。「やりたい」という生徒達の熱意と、中田の熱い指導によって生徒達は、徐々に新体操の面白さに目覚めていき、それに伴って技術も向上してきた。中田も、「あと何年かやれば形になるんじゃないか」という手ごたえを感じ始めていた。

ところが、赴任から一年経たないうちに、香川県から、中田にこないかという打診があった。翌年に地元開催のインターハイ、五年後には地元国体を控えていた香川県は、若くて熱意のある指導者を求めており、中田吉光に白羽の矢が立ったのだった。五、六回に渡り関係者は大阪を訪ねてきた。

しかし、中田は、やっと新体操を好きになって、自分についてきてくれるようになった生野工業の部員達を放り出すことは自分にはできない、と香川行きをずっと断ってきた。

卒業生を送る会でのこと。試合では金メダルを手に出来なかった卒業生達に中田は金メダルを用意した。「お前達は俺にとっての金メダルだ」そう言って一人ひとりに金メダルを掛けてやった。和やかな感じで進んでいたその会で在校生から「香川から何度もアプローチされていることを知っています。」「先生は、勝負できる人だから。ここじゃなくて香川に行ったほうがいい」という言葉が飛び出した。

「おれたちでは先生を勝たせてやれないから」「ここでは先生の思うような環境じゃないから」まだ十代の、一見、荒くれ坊主たちに見える工業高校の生徒達が、自分たちのことよりも「先生のため」「先生が輝けるよう

に」と考えて、香川に行くことを勧めてきたのだ。この部員達と一緒にやることを決めていた中田はその思いとは裏腹な彼らの言葉に「練習キツイんか、勝ちたくないんか」と尋ねた。お互いの思いがすれ違い平行線のまま時が流れ中田は香川行きを決断した。

香川へ出発する当日、突然部員達が中田の前に現れた。そして「僕たちにとっても先生は金メダルでした」と言って中田に金メダルを掛けてくれたのだ。思いもかけない贈り物に「こんなちゃっちいメダルなんかいらんわ。俺には全日本のメダルがある」口ではそう強気な言葉を吐きながら彼らの顔を見れずに中田は、香川へ旅立った。

＜写真提供：村岡美穂＞

「置いてきた選手のために負けたらいかん」香川での中田は、その一心で練習に励んだ。そして、坂出工業のコーチとして臨んだ平成元年のインターハイで優勝。その場に生野工業の生徒達も駆けつけてくれた。「やっぱりやりましたね」「先生、良かったですね」彼らから掛けられた言葉が、中田は何より嬉しかった。

その年のシーズン最後の北海道国体も準優勝というかたちで終了し、お世話になった生野工業に挨拶を兼ね訪問した中田は、先生方への挨拶はそこそこに体育館に向かった。新体操部員は二年生三名だけになっていたがマットの練習を黙々としていた。技術もかなり上達し驚かされた。中田は上着を脱ぎ捨て一緒に練習をした。

「こういう奴等を俺は捨ててきたんだ。何をしてるんだ俺は。」中田は強く自己嫌悪に陥った。

その後の中田は、坂出工業時代、全国大会五回の優勝、十回の準優勝と輝かしい成績を残す。その間、たくさんの生徒と出会い、紆余曲折しながらも絆を深め練習に励んでいった。そして、二〇〇二年青森大学の監督へ。そこにあったのは「また選手を置いて行く」という生野工業時代に経験したのと同じ思いだった。

「置いてきた選手のためにも負けたらいかん」中田の中でその思いはますます強くなり、その思いゆえに、二〇一一年でインカレ十連覇という偉業を成し遂げたといっても過言ではない。

坂出工業から青森大学へと続いていった指導者としての栄光は、いつも次のステージへと中田を送り出してくれた教え子達の思いやりのうえに築かれたものだった。そして、そのことを中田は今でも忘れていないのだ。だから、生野工業、坂出工業の教え子達にい

つまでも「おれは頑張ってるよ。お前らのおかげで今があるよ」と胸を張って言いたい。中田の「勝ち続けたい理由」の根底にはその思いがあった。

どんなチームでも、どんな監督でも、ずっと勝ち続けることはできないはずだ。しかるべきときに潔く負けてこそ勝負であるし、名将なのではないか。私はずっとそう思っていた。

だから、青森大学も中田吉光もいつかは負けるのが当然だと思っていたし、意地悪な気持ちではなくその「負けざま」を楽しみにしていた部分もあった。青森大学なら、中田なら、きっと「さすが！」と思える負けをいつか見せてくれるだろうと思っていたからだ。

しかし、一年前のあの日、中田は、「自分は勝ち続けなければならない」と頑なに言い張った。そして、出てきたのがこの初めての赴任校での話だった。

それなのに、なぜ今、監督をおりることにしたのか。私はそれが知りたくて、ユースチャンピオンシップのときに中田に話を聞くことにした。

……まずは、監督をおりた理由を教えていただけますか？

中田「一つには、大学でいろいろと改革が行われて、様々なことが変わったため、昨年までの高岩のようなコーチを置くことが難しくなってしまったという事情がありました。元々私は、部長兼監督と言う立場だったのでこれを機に高岩を監督にして、自分は部長のみという形にしたほうがよいという判断です。いずれも大学側がそう決めたことです。」

……つまり、やむを得ずということでしょうか？

中田「いや、ゆくゆくは高岩を監督に、とは以前から考えていたので、去年もそれを想定して高岩には経験を積ませてきました。高岩は、まだ若いですが、指導者としての芯はきちんと育ててきたつもりなので、機が熟したのだと思います。」

……監督を退かれてからは、本当に練習には行かれてないのですか？

中田「ちょっと見てほしいと頼まれれば行きますし、個人はわりあい見たりしていますが、団体はほぼノータッチです。前任者が口出しすれば、新しい人はやりにくいのはわかってますから。自分も坂出工業を指導する条件として、まだ二十三歳の若造でしたが、前任の先生に口出ししないでくれと、インターハイにはプラカード持って入るだけしてくださいとキツイお願いをし

て、それを守ってもらいましたから。」

……監督を交代することに不安はなかったんでしょうか？

中田「監督に必要なのは、自ら見て感じて研究する力、そして先見力をもちそれを発信する力だと思っています。高岩にはその力はあ

ると思うので、そこは心配していません。強いて不安があるとすれば、『熱』でしょうか。」

……熱、ですか。

中田「自分は、監督をやっている間、ずい分、勝たせてもらいましたが、それは、自分が体育館にいる誰よりも熱をもっていたからだと思っています。練習の体育館でも試合会場でも、熱さでは絶対に誰にも負けない自信があったし、だから勝ってこれたと思ってます。そこだけはまだ高岩には足りないかもしれません。」

……なるほど。もっともいきなり「中田超え」を求めるほうが酷な気がしますが。

中田「高岩は非常に素直なんです。それは自分にはない彼の美点です。足りないものは足りないと指摘することもありますが、指摘されたときに落ち込んだり怒るのではなく、『ありがとうございます』と受け入れる高岩の度量は素晴らしいと思います。」

……選手達には動揺はありませんでしたか？

中田「多少はあったかもしれませんが、徐々に慣れて受け入れてきていると思います。ち

やんと高岩をたてたうえで選手達が私に頼ってきたり、相談してくる分には、私もできるだけのことはするようにしています。」

……いざ監督をおりてみて、さびしくないですか？

中田「自分はずっと現場が好きだったし、体育館が好きだった。それは変わりませんよ。今でも、できることなら監督を続けたかった

という自分の気持ちは、多分、高岩がいちばんよくわかっていると思います。」

……以前、昔の教え子のためにも、「ずっと勝ち続けたい」とおっしゃいました。監督をおりる決心はどうやってつけられたのでしょう？

中田「いつまでも現場でやっていたいという気持ちは正直ありました。今でもあります。だけど、他にやらなければならないことがある、という現実に向き合わなければならなくなったということです。」

……それは、「男子新体操」全体のこれからのことなどでしょうか？

中田「そうですね。昨年、男子新体操委員会発足ということで、委員長という立場になりましたが、なかなか思うように進まないことが多かったのです。自分もそこにあまり時間がとれなかったという反省もあります。そして、ここにきて、スポーツアクロとの融合という大きな課題も持ち上がってきました。

この半年くらいは、その問題もあって、舵取りを誤れば男子新体操の未来がなくなってしまうんじゃないかという重圧を常に感じていました。そして、その過程で、自分は青森大学だけにこだわっていられる立場ではないのだな、という自覚も芽生えてきました。

大層なことを言うようですが、今度は『日本の監督になる』という気持ちで、男子新体操の未来をよりよくするための活動に力を注ぎたいと思っています。幸いスポーツアクロとも協力的な関係を作っていけそうな手ごたえもあり、お互いにとっていい形で融合できるように考え、これからは精力的に動いていきたいと思っています。

また、青森に関しては、男子新体操の後方支援的な活動をしたいと考えています。キッズの育成や演技会をひとつのステージにしたりと、青森から全国に発信し男子新体操をより普及させるための環境作りがこれからの自分の仕事じゃないかと思っています。」

中田吉光は、本当に体育館が大好きで、練習が大好きな監督だった。そして、生徒・学生達への思いが熱い。

その中田が、監督をおりたのだ。

さびしくないはずはない。

やることが山積みなのはわかっている。さびしがっている暇もないこともわかっている。それでも、その喪失感は想像に難くない。

今まであれほど現場での指導に情熱を傾けてきた人間が、これからは「男子新体操全体の未来」のために動くという。それは、なんとも心強い宣言ではないか。

私は、その言葉を信じたいと思う。

まだまだメジャーとは言えない男子新体操。恵まれた環境で練習できるところは数少ない男子新体操。何か大きなうねりがあれば、いつ飲みこまれてしまい、消滅してしまうかもしれないという危機が常につきまとう男子新体操。

それでも、このスポーツに出会い、このスポーツに魅せられ、情熱を傾ける子ども達、選手達、指導者達、ファン。そんな人達のために、男子新体操がなくならないように、より発展していけるように！　青森大学新体操部をゼロから作り上げ、強豪校に育て上げた中田吉光が、監督を辞してまで、いよいよ本腰をあげた。

「青森大学監督交代」というショッキングなニュースの実情はそういうことだったのだ。

「今、男子新体操に関わっているすべての人が、十年後に笑顔でいられるように。そのために自分にやれることはなんでもやっていくつもりです。」

かつての教え子達に、「今でも俺は頑張ってる！」と伝える方法は変わっても、やはり中田吉光は、熱く、誰よりも熱く、道なき道を切り拓き、進み続けるのだ。

（取材・文・写真／椎名桂子）

※二〇一二年五月二十五日インタビュー

Takako Kobayashi's Gallery

Before　フェアリー

2005 年、バクー(アゼルバイジャン)での世界選手権に出場した日本の団体チーム。メンバーは、大貫友梨亜、日高舞、井上実美、東川歩未、高橋麻理子、古城梨早。当時、国内の個人で力のあった選手達を召集し、わずか半年足らずの準備期間で世界選手権に挑んだ。住むところも学校もバラバラな選手達は、練習会場に行くだけで 2 時間かかることもざら。そんな環境ながらも世界選手権では、総合9位、種目別リボン6位と健闘し、北京五輪に向けての団体強化を選抜方式で行う原動力となった。

このころはまだ「フェアリージャパン」という名称はなかったが、フェアリーと呼ぶには「頼もしい」印象のチームだった。国内での演技披露では1度もノーミスを見せたことがないまま、本番ではベストパフォーマンスを見せる勝負強さは、恵まれない練習環境でも「JAPAN」を背負って戦うという覚悟をもったメンバーならではなかったか。彼女達がいなければ、「フェアリージャパン」は存在しなかったことを、私は忘れたくない。

＜文／椎名桂子＞

※このページでは、カメラマン・小林隆子氏撮影の貴重な写真を紹介します。

新体操魂　第１号

http://p.booklog.jp/book/53774

発行日　2012/7/18

編集＆制作／椎名桂子
取材＆文／椎名桂子・横田泉
撮影／小林隆子
表紙デザイン＆題字／小島杏奈

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/53774

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/53774

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ